
「心の性」優先 教員ら対応手探り

2006/05/18

「女兒で受け入れてもらえると聞いて、本人は涙を流して喜びました。興奮して眠れなかったぐらいでした」。性同一性障害(GID)と診断され、「女兒」として播磨地域の小学校に通う男児(7つ)の母親は、そう打ち明けた。GIDの子どもが不登校や自傷行為などに追い込まれる現状もある中、今回の学校側の受け入れについて、専門家からは「画期的判断」と評価する声も出ている。一方で、水泳の授業や性教育など、教員らは手探りで対応に当たっている。

「男の子のする野球はしたくない」

男児は五歳のとき、兄と同じ少年野球教室に入ることを拒んだ。もっと幼いころから、おもちゃの好みなどは“女の子”だった。

男性器が付いているから男の子だと母親は教えたが、「女の子なのになぜ付いているの」と泣いた。「(男性器は)いつ取れる?」と尋ねることも度重なった。

相談に訪れた病院のアドバイスを参考に、中性的な格好で通っていた保育園に女兒の服装で行かせた。形式上は男児扱いだったが、プールでもビキニを着た。野球の代わりにバレエ教室に通い始めた。

「以来、表情が明るくなった」と母親。それだけに、「女兒」としての通学が認められ、深く胸をなで下ろしたという。

* * *

岡山大学医学部の中塚幹也教授らがGID患者三百二十九人を調べたところ、小学校低学年までに性別の違和感を覚えた人は、二百四人(62%)。不登校の経験は、九十六人と29%を占めた。千葉県「あべメンタルクリニック」の阿部輝夫院長が、未成年のGID患者百十二人を対象とした調査では、八人(7%)がリストカットなどの自傷行為をしていた。

今回の男児の場合、別の児童から「保育園では男子トイレに行っていた」と言われるなど、教室では難しい場面も生じている。性教育や、男児が女兒用水着を着る水泳の授業など、今後の課題も見えてきた。

自らもGIDである東京都世田谷区議の上川あやさん(38)は「子どもが体とは別の性だと主張しても周囲が相手にしないケースも多く、自分が自分でいいという自己肯定感を子どもが持ちにくい」と指摘。偏見を持たず、周囲がサポートする必要性を訴えている。